

天神橋、長いな



「天神橋、長いな、落ちたら、こわいな」

大阪のわらべ歌。明治の末頃までは、天神橋のかかる大川は今よりずっと広く、天神橋は2倍近くも、長かったのである。

大坂北部の天満。天満宮を中心としたこのあたりは、天神橋筋を中心に、東は与力町、同心町の地名が今に残る役人の町、西はかつて、旅籠町、伊勢町、地下町、綿屋町、樽屋町、魚屋町、源蔵町、絹笠町などと呼ばれた下町が続いていた。さらに天満橋、天神橋、なにわ橋と続く大川岸には、青物市で盛えた「天満の市」や、菅原町の食品問屋が喧騒を極め、大川の対岸に八軒屋の船着場があり、その東には京町橋があって、京街道と熊野街道を結ぶ交通の要所でもあった。

天神祭に行きました。天神橋筋を歩いて、天満天神繁盛亭のある南森町側の裏門から入ると、「催し太鼓」が一人盛り上がり、祭り気分を掻き立てていました。

「催し太鼓」というのは、赤くて、長くて、四角い、烏帽子のようなものを被った6人の兄ちゃんが、掛け声と、間合いで太鼓を打っているダンジリで、いつの年も、この太鼓が天神祭りのお渡りの先頭で、大勢の引手が引いたり、担いだりして真夏の大阪の町を盛り上げようと頑張るんだが、何せ引手よりも、回りで、「さあ、ガンバレヤ、ガンバレヤ」「行かんかい、行かんかい」と、言っているだけの、ゆかたでハチマキの兄ちゃんのほうがはるかに多いから、なかなか前へ進まない。だから、その後やってくる、天狗面で馬に乗った猿田彦のじいちゃんは、「はよ、いかんかい」というのが口癖になってしまうそうです。

それから、天神祭りの花、「天神講」の獅子舞と傘踊りと四つ竹が、独特のテンポのよいお囃子と、長いタスキで華やかにやってくるというのが、おきまりなんです。でも最近は金髪のネエチャンばかりで、まあ、きれいだからいいけど、そういえば、獅子舞も金髪で、お揃いでしたね。

帰りは、花火と大川の船渡御を眺めながら、天神橋から南天満公園を抜けて天満橋に行きましたが、上ばかり観ていたら、いつの間にか一方通行を反対方向に歩いていて、「お宅、反対歩いてますよ。立ち止まらないで、上を見ないで、下を見ないで、前だけを見て歩いて下さい」とか言われて、うーん、天満橋は長く、天満橋の駅は、それはそれは遠かったのである。

天保8年(1837年)の3月25日、春とは名ばかりの寒い朝、ここ天満の地に時ならぬ砲声が轟いた。元大阪町奉行所与力で陽明学者の大塩平八郎が反乱の火の手をあげた、世にいう「大塩平八郎の乱」である。

時は天保の大飢饉の只中、打ち続く凶作、買占めによる米価の高騰、不正役人の横暴に義憤を抱いた平八郎は、大坂町奉行に窮民への救済策を建白する。しかし、平八郎の建白書は、当時腐敗の極みにあった奉行所で取り上げられることなく、ついに平八郎は決意する。救民のために決起する。「知行合一」。陽明学



者の平八郎にとって、それは避けることの出来ない運命だったのである。

その朝、大塩と同志達は、天満与力町の大塩の居宅「洗心洞」に蜂起の合図の火を放つと、ただちに「川崎東照宮」を襲撃、おりからの強風にあおられた火勢は、大塩達の決起の炎となって、天満の空に燃え上がった。決起軍は近在の貧民百姓を糾合しつつ、「救民」と大きく染めあげられた幟を先頭に、燃え盛る炎の中を、大川を渡るために天神橋を目指す。しかし、この時すでに、大塩らの動きを察知した幕府方によって、天神橋は落とされていた。このため決起軍の集団は付近の商家を襲撃しつつ、大川端を西に向かい、難波橋を目指した。彼らは、火事場頭巾やはっぴ姿などその装束はまちまちで、鍋や釜を武器にしている者もいる。やがて三百人あまりに膨れ上がり暴徒の集団となった反乱軍は、難波橋を押し渡り、北浜、北船場の豪商の屋敷を襲撃、次々に火をかけていったのである。

しかし、彼らの暴挙もここまでであった。幕府の正規軍が討伐の軍備を整え大阪城を出たのは、正午過ぎである。その数二千。幕府軍と反乱軍が対峙したのは、東横堀川の今橋から高麗橋のあたりであろう。勝敗は見えていた。幕府軍の砲撃で死者が出たのをきっかけに反乱軍は壊滅し、ほとんどのものが見物人に紛れて逃げ出してしまい、乱は午後4時ごろには終結した。大塩とその子の格之助も落ち延びるが、1カ月後に、市内の鞠に潜伏しているところを、幕府の取り方に追い詰められ、自害して果てる。享年44歳。乱の首謀者として処刑された者30余名、捕縛されたものは700名を数えた。乱で焼かれた家屋二万軒。天満は天満宮を含めてそのほとんどが焼け、天神橋も焼け落ちた。しかし、平八郎の拳は幕藩体制を揺るがし、30年後の維新回転に繋がっていくのである。

「大塩平八郎に会いに行こう」と少年が言った。ある場所で大塩の幽霊に会えるというのだ。小学校の五年ぐらいだったから半世紀も昔のことである。当時、西天満の鳴尾町に「天満教会」という教会があって、近在の小学生のために二階に机を並べ、図書室のようにしていた。正面の壁には聖母マリアとイエスがいた。そこは不思議な場所だった。教会には色々な小学校の子供達が来ていて、僕たちに大塩のことを教えてくれたのは、与力町の小学校の少年だった。

それからのことは、遥かな時間のかなたに霞んでいる。教会のことは覚えているが、僕は天満の幽霊に会ったのか、そんな少年が本当にいたのか。しかし夕闇が物語りの世界に人々を誘い、長い長い夏休みが終わる頃には、そんなことがあったとしても不思議ではない。もしそうだとすると、そこは天神橋に違いない。大塩平八郎が渡ろうとして渡ることが出来なかった天神橋。それは天満の人間にとって特別な橋。たぶん、僕達はそこで大塩平八郎に会った。

その日、少年たちは天神橋の向こうに、広い世界を見つめていた。それから、少年たちは夕日を背に受けて、天神橋を渡って行った。

「天神橋、長いな、落ちたら、こわいな」。

それは、やがて東京オリンピックから大阪万博を越えて、この国の繁栄を築いて行く戦士たちの旅立ちであった。